

2023. 2. 5 (日) 使徒7:1~8

7:1 大祭司は、「そのとおりなのか」と尋ねた。

7:2 するとステパノは言った。「兄弟ならびに父である皆さん、聞いてください。私たちの父アブラハムがハランに住む以前、まだメソポタミアにいたとき、栄光の神が彼に現れ、
7:3 『あなたの土地、あなたの親族を離れて、わたしが示す地へ行きなさい』と言われました。

7:4 そこで、アブラハムはカルデア人の地を出て、ハランに住みました。そして父の死後、神はそこから彼を、今あなたがたが住んでいるこの地に移されましたが、

7:5 ここでは、足の踏み場となる土地さえも、相続財産として彼にお与えになりませんでした。しかし神は、まだ子がいなかった彼に対して、この地を彼とその後の子孫に所有地として与えることを約束されました。

7:6 また、神は次のように言われました。『彼の子孫は他国の地で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる。』

7:7 また、神は言われました。『彼らが奴隷として仕えるその国民を、わたしはさばく。それから彼らは出て来て、この場所でわたしに仕えるようになる。』

7:8 そして、神はアブラハムに割礼の契約を与えられました。こうして、アブラハムはイサクを生み、八日目にその子に割礼を施しました。それからイサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長たちを生みました。

<説教>

初代教会の〈毎日の配給〉〈食卓のことに仕える〉奉仕者(6:1,2)ステパノは、恵みと力に満ち、知恵と御霊に満ちて奉仕をし、またイエスの証人として奉仕をしました。その結果、リベルテンと呼ばれる会堂に属するユダヤ人たちから〈モーセと神を冒瀆する〉者として訴えられ逮捕され、最高法院に引き出され、裁判を受けることになりました(6:8-15)。

そこでステパノについての偽りの証言がなされました。それは、彼が神の神殿とモーセの律法に逆らうことを語るのをやめないということ、そしてそれをあのイエスが言っているということでした。つまりステパノもあのイエスと同じで神とモーセを冒瀆し、神殿と律法を破壊し、神とモーセに逆らう者だということでした。

裁判長である大祭司(おそらくイエスの十字架の裁判のときと同じカヤパ)が被告人ステパノに「そのとおりなのか」と尋ねました(7:1)。ステパノはなおますます神に依り頼み、知恵と御霊に満たされて、神の〈御使い〉として堂々と証言します。

それは、神とモーセに逆らっているとの不当な訴えと偽りの証言に対して、「断じてそうではない」という反論であり、同時に自分の信仰の告白でもありました。つまり、まず自分は「聖書」に書かれていること(それは自分たちイスラエルの民の歴史ですが)を信じている、またその歴史を主権をもって支配し、歴史の中で生きて働いているのは神であると認めており、そういう主なる神を信じているという証しをするのです。神に逆らっているとか、神を冒瀆しているとかの訴えはとんでもないというわけです。そのためにステパノは、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、モーセ、ヨシュア、ダビデ、ソロモンと聖書に書かれているイスラエルの民の歴史を延々と語って行きます。モーセについても聖

書に従って語り、最後の方で神殿についても語ります。そんな中で、神のみこころに適わず、神に逆らうイスラエルの民の罪をも指摘することになります。更に、その昔の先祖たちと同じように、今のあなたがたも同じように神に逆らっていると言うことになります。

さて、まずステパノは、自分が神を冒瀆しているところではない、神こそは自分たちの歴史の主権者、導き手であると認め、信じ、崇め、神に栄光を帰していることを明らかにします。そのために彼は自分を告訴している人々も認め、〈父〉と誇っていたアブラハムから歴史を語り始めます。アブラハムを選んで語りかけ、ご自身を現し、ご自身のみこころを明らかにさせた〈栄光の神〉のことから語り始めるのです(7:2-4)。このように始めて、8節まではアブラハムを中心にして、最後にイサクとヤコブの名前が出てきます。

さてここ(2-8)でステパノは「主語」のほとんどを〈神〉として語っていることに気が付きます。ステパノは神がアブラハムに対していかにご自分の方から、いわば一方的に、権威をもって計画を立て、知らせ、アブラハムの身に次々とご自身のみこころを実行して行かれたが、そうやっていかに神がご自身の栄光を現されたかを語ったのです。

〈ハランに住む以前、まだメソポタミアにいた〉つまり〈カルデア人の地〉に父テラと一緒に住み、おそらくその地の異教の神(月の神)に仕えていたであろう偶像礼拝者アブラハムを〈栄光の神〉が一方的に恵みによって召し出してくださいました(2)。また次にアブラハムが〈ハラン〉に住んだ後、〈父の死後、神はそこから彼を…この地に移されました〉(4)。このように、神はアブラハムがどこにいても、ご自身がひとたび召し、祝福しようとお決めになったアブラハムをどこまでも追いかけて、みことばをお語りになって約束を与え、責任をもっていつも導いてくださいました。

なお、神がアブラハムに「あなたの土地、あなたの親族を離れて、わたしが示す地へ行きなさい」と言われたのが、創世記ではアブラハムが〈ハラン〉にいたときとされています(創世記 12:1)が、ステパノはそれが〈ハランに住む以前〉、〈メソポタミア〉(カルデア人の地)にいたときだったとします。しかし創世記 15:7 には後に主なる神が「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを導き出した主である。」とアブラハムに語られたと記されています。ですから神のアブラハムに対する召しは彼が〈まだメソポタミアにいたとき〉に既にあったことは確かです。

この神の召しにアブラハムは疑うことなく聞き従いました。そして〈まだ子がいなかった彼に対して、この地を彼とその後の子孫に所有地として与えることを約束され〉(5)た神を信じました。このようにステパノもアブラハムを「信仰の父」として認め、アブラハムを召し、語りかけ、約束どおりにお導きになった神を信じ、神に栄光を帰していました。

ですからステパノはここで自分の信仰は、どこまでも聖書に書かれている歴史、事実によっているのだと言っているのです。そしてもしステパノを訴えたユダヤ人たちの信仰が正しければ、自分と同じ信仰に至るはずだと主張しているのです。確かに大切なのは、まず神ご自身であり、その神の約束のみことばです。そしてその神への全き信仰、信頼と従順です。人間の考えや目には不可能と見え、ばかばかしいとさえ思え、全く希望がないと思えるときでも、神がお語りになり、神から与えられたことばなら、そこに希望を置くことです。〈約束してくださった方を真実な方と考え〉(ヘブル 11:11)ることです。

そもそも〈まだ子がいなかった〉そして肉体的にはもう不可能と思われた年齢だったアブラハムに子孫が与えられるという約束を信じるだけでも大変なのに、更にでは与えられ

た子孫が〈他国の地で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる〉(6)とのみことばも普通は大きなつまずきになると思いますが、続けて言われた〈彼らが奴隷として仕えるその国民を、わたしはさばく。それから彼らは出て来て、この場所でわたしに仕えるようになる〉(7)との約束(ここでステパノは創世記 15:14 のアブラハムへのみことばと出エジプト記 3:12 でのモーセに対するみことばを合わせています)をアブラハムは信じ、神の最善のみこころを信じて、神の約束を信じてそれで心安じたのです。出エジプト記のみことばをここに持って来たのは、アブラハムにとっても神に仕えること、つまり神礼拝(欄外注)こそが一番大事なことだったのは、自分たちユダ人たちにとっても同じことだと言おうと思ったからではないかと思います。

そういう神の約束のしるしとして神は生まれてくる子ども(この場合は当然男子)に割礼を施すように神はお命じになり、アブラハムはそれにも従順に従いました。

このようにして、ステパノはすべてのユダヤ人が〈私たちの父〉(2)、「信仰の父」として認めていたアブラハムを全面に出して、神と神の約束のみことばへの全き信仰と従順、神の約束の確かなことの確認、神から与えた希望を最後まで持ち続け、神を崇め、神を礼拝し、神に栄光を帰することこそが自分たちがしていること、自分たちの信仰なのだと言ったのです。〈私たちの父アブラハム〉が私たちの信仰の「原型」であると。だからその子孫たる者たちは、それにふさわしく、アブラハムにご自身を現された〈栄光の神〉を信じ(本当に正しく信じるなら、イエスをキリストと信じるほかない)、神に従うべきだと言って、神をほめたたえ、神に栄光を帰したのです。